

## —— 安全性向上3カ年計画を振り返って ——

NEXCO中日本は、中央自動車道笹子トンネルで発生した天井板落下事故の重大性に鑑み、『安全性向上3カ年計画』（以下、「3カ年計画」という。）の策定及び実施にあたり、専門的な見地より意見を求めるため、外部有識者からなる安全性向上有識者委員会（以下、「委員会」という。）を設け、我々6名はその委員として委嘱を受けた。

委員会では、笹子トンネル事故を契機とし、このような重大事故が現に生じたという事実を前提に、従来の仕組みや考え方にとらわれずに、将来に向けて再発防止のために必要と思われる施策を、『意見とりまとめ』（2013年7月26日）として取りまとめた。NEXCO中日本は、「二度とこのような事故を起こしてはならない」という深い反省と強い決意のもと、緊急的かつ集中的に取り組むべき施策を明らかにして、『意見とりまとめ』を反映した3カ年計画を策定し、これを実施してきた。

この間、3カ年計画の実施状況について、NEXCO中日本から定期的に報告を受け、委員会として進捗状況と成果を確認するとともに、計画の実効性をさらに高めるために、継続的に意見を申し上げてきた。

NEXCO中日本では、経営陣が先頭に立ち、取組みをチェック・フォローアップしながら組織的に継続して安全性向上に取り組んでいくことができる枠組みをつくり、その枠組みのもと、具体的な施策を体系化し、実行プロセスを見える化し全ての施策に精力的に取り組んできた。

そして、安全性向上に向けた事業として計画した道路上などに設置された構造物の撤去、移設または二重の安全対策など、現時点で必要と考える対策を完了させるとともに、個々の具体的な施策の成果を検証し、課題を認識した上で、今後も継続的に取り組むべき内容を明確にするなど、安全性向上の枠組みをつくり、精力的に取組み、成果をあげたことは、評価できる。

しかしながら、これは将来にわたり高速道路の安全性を向上させていくという、長い道のりのスタートラインについたに過ぎない。事故の記憶と安全を希求する気持ちは必ず風化していく。その風化するスピードを上回る安全風土づくりを弛まずやり続けなければならない。

安全性向上の取組みを積み重ね、いつの間にか「安全」が日常業務の中に組み込まれ、社員一人ひとりの行動にまで定着してはじめて、風化への歯止めとな

る。そして、定着とは、ある一定のレベルにたどり着いた状態をいうのではなく、更なる高みを目指して継続していく行為であり、枠組みをつくるよりもはるかに難しい。事故の記憶と安全を希求する気持ちを風化させることなく、経営陣が強いリーダーシップを発揮し、グループ社員が一丸となって、粘り強く安全性向上に取り組み続けなければならない。

高速道路の安全を現実的に支えているのは、グループ会社を含めた現場の社員である。現場社員の安全意識を高いレベルに間断なく保ち、現場社員の意欲と誇りを向上させるためには、経営陣は常に現場に向き合い、率先して現場重視の強い姿勢を具体的な行動で示すことが不可欠である。その際、経営陣は、通り一遍の報告では現場の実情を容易に把握できるものではないことを自覚した上で、現場で起こっている事実を迅速に、かつ正確に聞こうとする姿勢を現場に対して示し続けることが肝要である。

今後も劣化していく道路構造物では、これまでに経験していない事象が発生し得ることも考え、リスクに備えていかなければならない。そのためには、リスクに関する教育などを通じて、リスクに対する意識や感度を高めるとともに、経営陣と現場とがリスクを共有して、組織全体でリスクマネジメントを地道に継続していくことが重要である。

「人」と「技術」は、高速道路の安全を支える基盤である。そのため、中長期的な視点から、安全を担う専門性をもった人材を育て、責任と誇りをもって、十分力を発揮して働ける環境を整えることが重要である。さらに、高速道路の安全性を高める技術開発を推進し、安全を支える「人」と「技術」に磨きをかけていかなければならない。

高速道路の安全性向上こそ、利用者の命を預かる高速道路会社の最大の使命であるという自覚を持ち続け、NEXCO中日本には、その先駆的な役割を担ってもらうことを強く期待している。

2016年6月8日  
安全性向上有識者委員会